

台湾における論語教育：高級中学教科書『中國文化基本教材』（國立編譯館版）研究(1)

荒木, 雪葉

西南学院大学：非常勤講師 | 西九州大学：非常勤講師 | NPO法人和の文化研究会：理事

<https://doi.org/10.15017/26560>

出版情報：地域健康文化学論輯. 7, pp.1-14, 2012-09-30. 地域健康文化学会
バージョン：
権利関係：



台湾における論語教育

——高級中学教科書『中國文化基本教材』（國立編譯館版）研究（1）

荒木 雪葉

0. はじめに

本稿は、台湾の学校教育における論語教育について研究する一環として、論語教育に関する教科書について考察するものである。対象教科書は国立編譯館『中國文化基本教材』（全六冊）とする。本稿では主に第一冊を取り上げる。

台湾では高級中学（日本の高等学校にあたる）の国文の授業中に、『論語』・『孟子』を主とした中国文化を学ぶ機会がある。民国九十四年までは「中國文化基本教材」による国文の講義は必修であり、民国九十五年以降は選修の「論孟選讀」という科目に改編された。

台湾の教育を論じた日本の論文は多いが、論語教育を主眼としたもの、また『中國文化基本教材』を材料として扱ったものは、管見の限り見当たらない。一方台湾には同じ材料による論文があり、陳怡樺氏の「高中《中國文化基本教材》編纂沿革研究」^一は『中國文化基本教材』という教科書の歴史的沿革と内容の分析とを主題としている。論文中では複数の出版社の教科書を比較し、教科書に引用された『論語』『孟子』の引用元を詳細に分析している。また張宏儒氏の「經典教育學習歷程 探索文化基本教材實施策略」^二では、經典教育について研究するにあたって教科書『中國文化基本教材』を通じた考察を行っている。

本稿で扱う教科書は、民国九十五年の改編以前に用いられていたものであり、この教科書の内容を考察することによって、他出版社の教科書との比較、また民国九十五年以降に採用されることとなる教科書『論孟選讀』との比較を行う礎とする。特に本稿では、『論語』を用いた教育を行う部分のうち、孔子の為人を紹介した箇所を取り扱う。教科書における『論語』引用と一般的な『論語』解釈との差異を明らかにすることによって、教科書編纂の意図を考察する。

一 陳怡樺「高中《中國文化基本教材》編纂沿革研究」國立台灣師範大學國文系教學碩士論文、民國一〇〇年一月
二 張宏儒「經典教育學習歷程 探索文化基本教材實施策略」明道大學課程與教學研究所碩士論文、民國一〇一年一月

1. 教科書の構成

本稿で取り上げる教科書は次のような構成となっている。

- 第一冊…孔子之為人 論学 論仁 索引
- 第二冊…論孝 論道德修養 論士 論君子 索引
- 第三冊…論詩礼楽 論教育 論政治 論古今人物 孔門弟子 索引
- 第四冊…孟子之抱負 道性善 弁義利 論涵養 索引
- 第五冊…論教学 論治道 尚論古人 索引
- 第六冊…大学選 中庸選 附朱熹章大学、中庸全文

第一冊から第三冊までは『論語』からの抜粋をテーマごとにまとめたものになっており、それぞれの巻末に索引が付されている。索引では、『論語』の中からこの教科書に引用されたもののみを、『論語』の篇の順番に並べて書かれている。

第四冊・第五冊は孟子からの抜粋をテーマごとにまとめたものである。第一冊から第三冊と同様に巻末に索引が設けられており、孟子がこの教科書に引用された部分のみを掲載してある。

第六冊は大学と中庸からの抜粋と、朱子の大学章・中庸章の全文を掲載してある。

『論語』や孟子からの抜粋については、次のような構成となっている。

まず各テーマに沿って集められた『論語』の章が掲載され、解釈しがたいと思われる語句に注釈がつけられ、最後に章の大意を現代語で紹介している。現代語による紹介の部分は、必ずしも全訳にはなっていない。

たとえば図一は「論仁」部分に掲載された子路篇の章である。「剛毅木訥近仁」という原文について、剛・毅・木・訥それぞれの語句に注釈がつけられている。興味深いのは、難読文字の音を注音字母で記していることである。「訥」の文字は中華人民共和国のピンインで書く「nè」となるが、台湾で主に用いられている注音字母という発音符号で、「nè」あることは「nà」という発音であることが記されている。

原文・語句の注釈・意味の注釈を記すという各章に関するこの構成は、『論語』など古典の注釈書を編む際の伝統的な方法でなされている。

樂、それらを教える教育についての章を紹介したあと、最後に学問成就の目標としての政治について論じているのである。ここまでは個人の修養であり、『論語』学習の主たる部分である。この後には様々な人物に関する評価、孔子門下の弟子を紹介し、『論語』に書かれた内容をほぼ把握して終わることになる。

3. 「孔子之為人」部分についての考察

ここからは、教科書に挙げられた各テーマに沿って、その内容を確認していきたい。テーマごとに抜粋された章の構成を見ることによって、教科書が意図する教育の流れを把握するのが目的である。本稿では最初のテーマとして挙げられている「孔子之為人」部分について考察を進める。

孔子の為人を表す章として挙げられているのは全部で二十九章である。これらをさらに十の小テーマに分類し、小テーマごとに数章がまとめて掲載されている。以下、抜粋されている順に、原文と「章旨」とを紹介しつつ各小テーマごとに考察を加える。小テーマは「」にて示し、筆者が資料の「章旨」から読みとって記載した。なお章旨の原文は中国語であり、ここでは拙訳を掲載した。各章ごとの見出しの「」付き漢数字は、教科書どおりの記述である。

「孔子の志」

(一) 顔淵、季路、侍。子曰：「盍各言爾志？」子路曰：「願車、馬、衣、輕裘，與朋友共，敝之而無憾。」顔淵曰：「願無伐善，無施勞。」子路曰：「願聞子之志！」子曰：「老者安之，朋友信之，少者懷之。」——公治長第五・二五

【章旨】孔子と顔淵・子路がそれぞれ自分の志を述べたのである。

(二) 子路、曾皙、冉有、公西華侍坐。子曰：「以吾一日長乎爾，無吾以也！居則曰：『不吾知也！』如或知爾，則何以哉？」

子路率爾對曰：「千乘之國，攝乎大國之間，加之以師旅，因之以飢饉，由也爲之，比及三年，可使有勇，且知方也。」夫子哂之。

「求，爾何如？」對曰：「方六七十，如五六十，求也爲之，比及三年，可使足民；如其禮樂，以俟君子。」

「赤，爾何如？」對曰：「非曰能之，願學焉。宗廟之事，如會同，端章甫，願爲小相焉。」

「點，爾何如？」鼓瑟希，鏗爾，舍瑟而作。對曰：「異乎三子者之撰！」子曰：「何傷乎？亦各言其志也。」曰：「莫春者，春服既成；冠

者五六人，童子六七人，浴乎沂，風乎舞雩，詠而歸。」夫子喟然歎曰：「吾與點也。」

三子者出，曾皙後。曾皙曰：「夫三子者之言何如？」子曰：「亦各言其志也已矣！」曰：「夫子何哂由也？」曰：「爲國以禮，其言不讓，是故哂之。」「唯求則非邦也與？」「安見方六七十，如五六十，而非邦也者？」「唯赤則非邦也與？」「宗廟會同，非諸侯而何？赤也爲之小，孰能爲之大？」——先進第十一・二五

【章旨】孔子が弟子に志を言うように導き、また褒める気持ちを与えている。

以上の二章からは孔子の志が、天下の人がみなふさわしい場所を得ることにあるということが分かり、度量が広いことが分かる。

教科書全体の導入部である「孔子之為人」のさらに導入として、孔子の志が紹介されている。(一)において、子路と顔淵も修養を積むことを志としている。一方で孔子の「老者はこれに安んじ、朋友はこれ信じ、少者はこれに懐く」という志は、修養を積んだ結果どのような人になりたいのかということが述べられている。修養はあくまで理想の人格である君子となるための手段であり、(二)においては、子路も顔淵も手段そのものを志としている。この章を通して、勉学を通して立派な人間となり、他者から認められて、自然と人々が集まってくるような人になることを志とすべきだということを学ぶことができる。また人々がそれぞれ安んずるべき場所に安んずることが孔子個人の志なのである。

(二)について、本来この章の意味は、子路・冉有・公西華の志が政治に関係したものであったのに対して曾皙の志だけは異なるものであり、孔子が曾皙に与するというものである。自分の分に合った志を持つことを孔子は褒めているとする。

【孔子の謙遜】

(三)子曰：「德之不脩，學之不講，聞義不能徙，不善不能改，是吾憂也。」——述而第七・三

【章旨】孔子は徳を修めること・学問を講ずること・義に従うこと・過ちを改めることの四つについて自らつとめていた。

(四)子曰：「若聖與仁，則吾豈敢！抑爲之不厭，誨人不倦，則可謂云爾已矣！」公西華曰：「正唯弟子不能學也！」——述而第七・三三

【章旨】孔子は聖・仁の名を謙遜して辞退したが、しかしそれだけの内実を備えている。

(五)子曰：「君子道者三，我無能焉：仁者不憂，知者不惑，勇者不懼。」子貢曰：「夫子自道也！」——憲問第十四・三〇

【章旨】 孔子はみずから謙遜してまだ君子の徳が完成する三種の境地に達していないとした。仁の人は憂えず、知の人は惑わず、勇の人は懼れないという境地である。

以上の三章はどれも孔子が自分の願いを示してまだ及んでいないと謙遜している。

修養の具体的な目標について、孔子自身がまだできていないとして謙遜した数々の願いを通して提示している。目指すべき項目が提示されるとともに、すでにそれらの美德が身についていても誇らずに謙遜するということを学ぶことができる。

「孔子自らができるとしたこと」

(六) 子曰：「默而識之，學而不厭，誨人不倦，何有於我哉？」——述而第七・二

【章旨】 孔子が自ら学問を修めることと人を教える態度について述べた。

(七) 子曰：「出則事公卿，入則事父兄，喪事不敢不勉，不爲酒困，何有於我哉？」——子罕第九・一五

【章旨】 孔子が忠誠・孝弟・喪葬・酒を慎むことのそれぞれにおいて、ひとしくゆつたりと落ち着いて行つた。

以上の二章は孔子が自分にできることを自ら述べたものである。

前には謙遜を学んだが、ここでは孔子ができるとしたことを学ぶ。孔子が謙遜した項目と出来るとした項目とを比べてみると、出来るとした項目のほうが身近であり、人として身につけておくべき基本的項目である。教科書は孔子すらできないと謙遜した大目標を提示したあと、孔子は出来るとした小目標を掲げることにより、高中生の段階で行うべき徳目を示していると考えられる。

「孔子が自らの性質と学識教養について語ったもの」

(八) 子曰：「飯疏食，飲水，曲肱而枕之，樂亦在其中矣！不義而富且貴，於我如浮雲。」

——述而第七・一五

【章旨】 孔子が貧しさに安んじ路を楽しむ精神を示した。

(九) 葉公問孔子於子路，子路不對。子曰：「女奚不曰：『其爲人也，發憤忘食，樂以忘憂，不知老之將至也云爾！』」——述而第七・一八

【章旨】 孔子が自ら学問を研究する楽しさについて述べた。

(二〇) 子曰：「我非生而知之者；好古敏以求之者也。」——述而第七・一九

【章旨】 孔子は自分を「いにしえを好み求めることに敏感」な人であるとし、そのことを借りて人に虚心に学問へ向かうことをはげましている。

(二一) 子曰：「莫我知也夫！」子貢曰：「何爲其莫知子也？」子曰：「不怨天，不尤人；下學而上達。知我者，其天乎！」——憲問第十四・三七

【章旨】 孔子は世の中が自分を分かってくれないことを歎き、子貢の語にちなんで、自分の学問が怨まず責めず、下は人間のことがらを学んで上は天理にまで達するという境地にあることを言った。
以上の四章はどれも孔子が自らの性質と学識教養について述べたものである。

ここで説かれているのは、いずれも孔子が学問の道を邁進しているということである。教科書は先に目指すべき小目標を掲げたが、これもやはり一朝一夕に成就するものではない。そこで努力して学び続けることを説いているのである。

「孔子の世の中のために働きたいという願い」

(二二) 子曰：「甚矣，吾衰也！久矣，吾不復夢見周公。」——述而第七・五

【章旨】 孔子が、その道が行われず、人はすでに老いて衰えてしまったことを歎く。

(二三) 子貢曰：「有美玉於斯，韞匱而藏諸？求善賈而沽諸？」子曰：「沽之哉！沽之哉！我待賈者也！」——子罕第九・一二

【章旨】 孔子がわが身の才能や道徳を思い、すばらしい玉に遇って重用されることを期待している。

(二四) 子路宿於石門。晨門曰：「奚自？」子路曰：「自孔氏。」曰：「是知其不可而爲之者與？」——憲問第十四・四一

【章旨】 隱者晨門の言葉を記しており、聖人が天下のときを見るときには何かをしないではいられないという積極的な精神を見出すことができる。

(二五) 長沮、桀溺耦而耕。孔子過之，使子路問津焉。長沮曰：「夫執輿者爲誰？」子路曰：「爲孔丘。」曰：「是魯孔丘與？」曰：「是也。」曰：「是知津矣！」問於桀溺，桀溺曰：「子爲誰？」曰：「爲仲由。」曰：「是魯孔丘之徒與？」對曰：「然。」曰：「滔滔者，天下皆是也，而誰以易之？且而與其從辟人之士也，豈若從辟世之哉？」耰而不輟。子路行以告，夫子憮然曰：「鳥獸不可與同群！吾非斯人之徒與而誰與？天下有道，丘不與易也。」——微子第十八・六

【章旨】孔子が天下を周遊し、隠者にそしられたことを記す。しかし夫子もまた隠者の消極的で悲觀的であることに對して良くないとしている。

以上四章はいずれも孔子が世の中のために働きたいという願いを表している。孔子の志が己を修め人を治めることにあり、世の中のために働くことに気持ちがあっても、絶対に道義の原則を捨て去ることがないということを読みとることができる。

學問に邁進する目標は、世の中のために働くということである。この部分には隠者の考え方との比較が行われている章が二章引用されており、隠者が世間から逃避することを勧めているのに対して孔子はあくまで人のため世の中のために働くことが目標であることを教えている。

〔孔子の日常生活における態度〕

(二六) 子之燕居，申申如也，夭夭如也。——述而第七・四

【章旨】孔子が家にいるときに落ち着いているさまを記す。

(二七) 子温而厲，威而不猛，恭而安。——述而第七・三七

【章旨】孔子の様子が和になつており、うやうやしく重々しくあることが自然だということである。

(二八) 子禽問於子貢曰：「夫子至於是邦也，必聞其政。求之與？抑與之與？」子貢曰：「夫子温、良、恭、儉、讓以得之。夫子之求之也，其諸異乎人之求之與！」——学而第一・一〇

【章旨】孔子には温、良、恭、儉、讓の美德があるために、政にあずかるのである。

(二九) 子絶四：毋意，毋必，毋固，毋我。——子罕第九・四

【章旨】 孔子が戒め除くことを記す。

以上四章は孔子の日常生活の態度や現れ出た有様を記す。

ここからは志というテーマから離れて、孔子個人のことにについて述べる。やはり理想的な日常生活における態度として、ゆったりとくつろぎ落ち着くことや、うやうやしく重々しくあること等が挙げられているのであろう。

〔孔子の言行〕

(二〇) 子之所慎…齊、戰、疾。——述而第七・一二

【章旨】 孔子が特に慎むことが三つあることを言う。ものいみ、戦争、病気である。

(二一) 子不語…怪、力、亂、神。——述而第七・二〇

【章旨】 孔子があやしいこと、力だのみのこと、世の中を乱すこと、鬼神のことは語らなかったということを記す。

(二二) 季路問事鬼神。子曰…「未能事人，焉能事鬼？」曰…「未知生，焉知死？」——先進第十一・一一

【章旨】 孔子は鬼神や死後など、明らかにし難く、語っても無益であることは言わなかったということを記す。

(二三) 孔子於鄉黨，恂恂如也，似不能言者。其在宗廟、朝廷，便便言，唯謹爾。——鄉黨第十・一

【章旨】 孔子は郷党と宗廟朝廷とでは言葉や様子が異なっていたことを記す。

以上四章は、孔子の言行は飾り気がなく、場合に合わせて異なっており、それぞれに適切な表現をするという態度を記している。

ここは先に挙げられている日常生活における態度とは異なり、主につつしむべきことがらに対する態度について述べている。あやしいことや死についてなど神秘的で明らかにし難いことがらについては言葉を慎む。しかしいつでも口を慎むのが良いわけではなく、状況に応じた行動をすべきことを述べている。

〔孔子が他の人と一緒にいるときの態度〕

(二四) 子與人歌而善，必使反之，而後和之。——述而第七・三一

【章旨】孔子は人の善を楽しんで受けとることを記す。人と一緒にいるときに親しみのある態度であることが分かる。

(二五) 子食於有喪者之側，未嘗飽也。子於是日哭，則不歌。——述而第七・九

【章旨】孔子はとむらいのときには悲しみの真心をつくすことを記す。

以上の二章は、孔子が人と一緒にいるときに、態度は親しみがあり自然で、しかもつねに惻隱の心がにじみ出ていることを記す。

人と一緒にいるときの態度について論じている。ここで「惻隱の心」という語が見られる。孟子からの引用である。

〔孔子の惻隱の心〕

(二六) 厩焚。子退朝，曰：「傷人乎？」不問馬。——鄉黨第十・一二

【章旨】孔子は家畜よりも人を重んずることを記す。

(二七) 子釣而不綱，弋不射宿。——述而第七・二六

【章旨】孔子がものを取るのに節約することを記し、仁の人の心根をあらわしている。

以上二章は孔子の惻隱の心は人間のみに向けられたものでなく禽獣にも向けられたものであるが、やはり先後があり、民への仁から物を愛することにまで及ぼすことを記しており、なごやかな仁の人の度量を表している。

ひきつづき「惻隱の心」について述べられている。惻隱の心は動物にまで及ぼすべきであるが、あくまで人間に優先順位があることを言う。

〔孔子門下の高弟による孔子讃美〕

(二八) 顏淵喟然歎曰：「仰之彌高，鑽之彌堅，瞻之在前，忽焉在後；夫子循循善誘人，博我以文，約我以禮，欲罷不能。既竭吾才，如有所立，卓爾，雖欲從之，末由也已！」——子罕第九・一〇

【章旨】顏淵が、孔子の道が広く大きく高く深いことや、孔子が人を導くのにたけていることを讃嘆している。

(二九) 叔孫武叔毀仲尼。子貢曰：「無以爲也！仲尼不可毀也！他人之賢者，丘陵也，猶可踰也；仲尼，日月也，無得而踰焉。人雖欲自絶，其何傷於日月乎？多見其不知量也！」——子張第十九・二四

【章旨】子貢が孔子の徳は太陽や月のようであることを讃美し、そうすることで孔子をそしめる人が己の分を知らないということをとがめている。

以上の二章は二名の孔子門下の高弟の、孔子に対する賞讃の語である。孔子の人格が気高く偉大であることは、ここからますます読みとれる。

「孔子之為人」部分の締めくくりとして、弟子による孔子評価が掲載されている。その人を理解している人はその人を正當に評価する。また時にはそしられることもあるが、それはあまりに偉大であつて凡庸な人物には理解できないからだとするのである。

ここまで「孔子之為人」部分についての考察を行った。ここで紹介されている孔子の為人とはすなわち目指すべき生き方であろう。

本教科書で提唱している生き方は、次のとおりである。己を見つめて自分の分にあつた志を持ち、孔子でさえ及ばないような大目標を目指しながらも、身近な小目標から達成させてゆく。そのためには努力して学び続けることが大切である。学問を積んで目指すべき具体的な状況とは、世の中のために働くことである。日常生活では、ゆったりとくつろぎ落ち着いており、うやうやしく重々しい。あやしいことや神秘的なこと、死などの明らかにし難いことについては口を慎む。人と一緒にいるときには思いやりをもつ。思いやりは人間のみならず、動物に対しても発揮されるべきであるが、あくまで人間に優先順位がある。そしてこのような生き方は、正當に評価してくれる人はほめたたえ、そしられたとしても、それは相手がすばらしさを理解できないからである。

さて、本教科書はどのような意図を以て『論語』からの引用を通じて生き方を提示しているのだろうか。「孔子之為人」部分で一般的な解釈と異なるのは、(一)(二)に挙げられた志についての章解釈である。4では志についての章解釈を比較することで、教科書の意図を明らかにしたい。

4. 志に関して

志に関して、この教科書では触れられていない点が二つある。

一つは政治に関する志である。孔子の志として紹介された(一)(二)の章旨を読むと、孔子の志は政治を行うことには無いように見える。本教科書の第三冊では政治のことを論じた部分があるが、政治の根本は礼樂であることや具体的な政治のやり方に触れてはいるものの、政治を行うことと修養するにあつたての志との関係は述べられていない。しかし実際に『論語』を解釈すると、(一)は為政者としての志にも通ずるし、(二)における舞雩は雨乞いという大切な祭祀を行う場所であつて、政治とつながりがある。そもそも孔子は政治を行うことで自分の理想を実現しようとも考えていた。『論語』には公山不擾が費を本拠地として魯にそむき孔子を招いたとき、孔子は「もし我を用うる者あらば、吾は其れ東周を為さんか」と言つたとある(陽貨第十七)。為政者となることは決して修養の最終目標ではなく、人間として修養を積んでいくうちに自然と士官の道を得ることができるというのが『論語』における考え方である。とはいえやはり、士官をせずに生活をするのは難しく、孔子自身も孔子門下の弟子たちも、おおむねどこかに仕官している^三。やはり修養と政治とは密接に関わりをもつのである。一方本教科書では孔子や弟子たちの志から政治の色が省かれていることから、本教科書は、自分を見つめて己の分を知り、自分を高めることを志とすべきだと教えていることが分かる。

もう一つは、志という語に含まれた厳しさである。(一)(二)について教科書でまとめた個所によると、これらは孔子の「胸懷十分開闊《度量が十分に広い》」ことを示しているという。しかし志は、次のようなものであるともいう。

子のたまわく、三軍も帥を奪うべきなり。匹夫も志を奪うべからざるなり。(『論語』子罕第九)

子のたまわく、士、道に志して、惡衣惡食を恥ずる者は、未だ与に議るに足らず。(『論語』里仁第四)

子のたまわく、志士仁人は、生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り。(『論語』衛靈公第十五)

志というものは、大軍の総大将よりも奪うことが難しいものである。換言すれば、他人によって簡単に奪われてしまうものは志ではないのであり、いったん志せば必ずそれを持ち続け、成就に向かって進まなければならないのである。

また成就への道を進むにあたつては、衣服や食事の悪いことにこだわるようではいけない。もちろん「文質彬彬として然る後に君子たり」

三 顔淵と漆雕開とは仕官をしなかったようである。ことに漆雕開については『論語』公冶長篇に「子、漆雕開をして仕えしむ。対えて曰わく、吾れ斯れをこれ未だ信ずること能わず。子説ぶ」とあるように、孔子から仕官を勧められたにも関わらず、まだ修養が足りないからと断り、孔子はそのことを喜んだのである。このことから仕官の道は最終目標ではないことがはっきりする。

『論語』雍也第六）と言われるように、志をもっているからといって外見を全く気にしないのは調和がとれておらず良くないのであるが、外見や自分の快樂にばかりこだわっているのでは、道を志す士とは言えないのである。さらに志士仁人は、仁のためには身を殺すことさえあるという。

このような志に関する政治との関連や厳しい側面について、本教科書で触れられていないのはなぜだろうか。本教科書の「編輯大意」には、「所選各章，以能表現中國文化特色，並能配合現代人之思想觀念為主」とある。すなわち本教科書の編纂にあたり、現代人の思想觀念と合致しない章は採用されなかったのである。高中生に対しては、志と政治を結びつけること、また志は厳しいものであるということよりも、孔子の為人すなわち理想的な生き方においては学や仁、惻隱の心を教えることを重視したのである。

5. まとめ

本稿では台湾における論語教育について研究する一環として、民国九十四年度まで用いられていた『中國文化基本教材』という教科書の第一冊「孔子之為人」部分について考察を行った。

『中國文化基本教材』は四書の伝統的注釈書の形式をとっている。ただし『論語』『孟子』などの各章はテーマに合わせて抜粋され、並び変えられている。

「孔子之為人」部分はさらに十の小テーマに分けられている。孔子は自分の分にあった志を持つ度量の広い人物で、休まず学び、惻隱の心を人間や動物にまで及ぼす。孔子を本当に理解している人はほめたたえ、孔子をそしめる人は孔子の素晴らしさを理解できない人物なのである。ここでは孔子の人物を紹介すると同時に、理想的生き方を提示しているとも言える。

これらの小テーマの中で、『論語』本来の解釈と異なるのが「志」についての解釈である。志が政治と関係すること、また志を抱くのは厳しいことであるということについては、教科書には触れられていなかった。教科書が編纂されるにあたって、志と政治との関連や志の厳しさは現代人の思想觀念には合致しないと考えられたのである。

本稿では以上のようなことが明らかになった。ただしなぜ志と政治との関連や志の厳しさが触れられていないのかという点については、民国七十二年の高級中學國文課程標準が制定された当時の社会的状況などを考慮しなければならず、また同時期に出版された他出版社の教科書について考察する必要もある。今後は國立編譯館『中國文化基本教材』研究を続けると同時に、台湾の社会的背景を考察対象にいれつ

つ、他出版社の『中國文化基本教材』教科書の研究を行い、また民国九十五年以降実施されている「論孟選讀」科にて用いられる教科書『論孟選讀』についての研究も進め、台湾の高中における論語教育の状況について明らかにしてゆきたい。

参考・引用文献

國立編譯館『中國文化基本教材 第一冊』國立編譯館、中華民國七十七年

陳怡樺「高中《中國文化基本教材》編纂沿革研究」國立台灣師範大學國文系教學碩士論文、民國一〇〇年一月

張宏儒「經典教育學習歷程 探索文化基本教材實施策略」明道大學課程與教學研究所碩士論文、民國一〇一年一月

[Study about the Teaching of the Analects of Confucius in Taiwan (1)]

[ARAKI Yukiha／西南学院大学非常勤講師・西九州大学非常勤講師・NPO法人 和の文化研究会理事／中国思想史・比較文化]